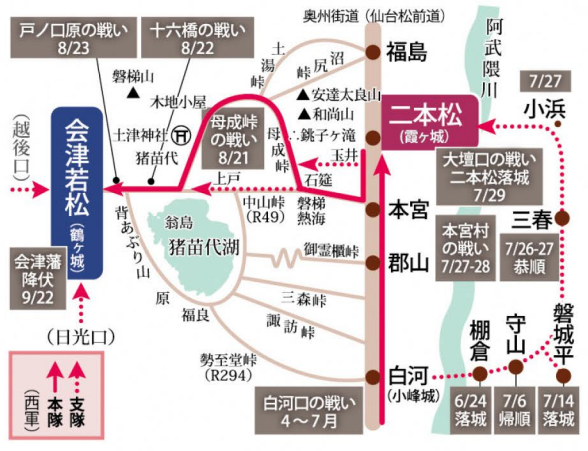


二本松～会津若松 1868年
戊辰戦争 西軍(討幕軍)進攻図



戊辰悲話の地

幕府軍の要衝であった二本松藩の玉碎戦は壮絶を極め、一連の戦いは戦場で幼き命を散らした「二本松少年隊」の悲劇の舞台となった。慶応4年(1868年)旧暦7月29日二本松城落城。二本松城を占領した新政府軍は、討論の末、次の標的を会津藩に定め、この戦いで武士の時代は終焉を迎える。二本松城は戦禍により焼失するも、城跡は現在公園として整備され、春には往時を偲ぶがごとく花霞が煙り、多くの花見客が訪れている。

石畳を昇るとシタレザクラが出迎える**大隣寺(写真下)**は、二本松藩主丹羽家代々の菩提寺として尊崇を集めてきた。境内にある群霊塔は戊辰戦争において遺体が発見された戦死者全員の供養塔。この群霊塔の左右に、愛する郷土を守るために戦った隊長以下の少年隊士の供養塔がある。

二本松城下は、城手前の観音丘陵が天然の要害となり、難攻不落の城として知られていた。そのような二本松城(P4参照)が、最初にして最大の被害を受けたのが、幕末を揺るがした戊辰戦争である。

大壇口古戦場(写真右下)は、隊長・木村銃太郎、副隊長・二階堂衛守が率いた12〜17歳からなる二本松少年隊25名の奮戦地。尼子台を破った土佐の板垣退助率いる新政府軍本隊との攻防戦は、歴然とした戦力差のなかでの玉碎戦となった。新政府軍の指揮を執った野津七次(のちの元帥陸軍大将野津道貫)をして、「恐らく戊辰戦争中、第一の激戦であったろう」と言わしめた二本松城下の戦いの主戦場であった。

供中口古戦場(写真左下)は奥州街道を進む新政府軍本隊とは別に小浜方面から薩長兵を主力とする別働隊が進軍し、戦闘となった場所。阿武隈川を挟んで対峙した三浦権太夫義彰は、自ら天皇に刃向かう意思のないことを表すため、狩衣姿に鎌を外した弓矢を携え出陣し、敗色濃厚となると農兵を退却させ、ここで一人壮烈な自刃を遂げている。



大隣寺 大壇口古戦場(写真右下)は、隊長・木村銃太郎、副隊長・二階堂衛守が率いた12〜17歳からなる二本松少年隊25名の奮戦地。尼子台を破った土佐の板垣退助率いる新政府軍本隊との攻防戦は、歴然とした戦力差のなかでの玉碎戦となった。新政府軍の指揮を執った野津七次(のちの元帥陸軍大将野津道貫)をして、「恐らく戊辰戦争中、第一の激戦であったろう」と言わしめた二本松城下の戦いの主戦場であった。

若き日の独眼竜

小手森(おてのもり)城は、小浜城主大内氏の支城で、二本松市針道にあった城館。1585年(天正13年)、独眼竜と恐れられた伊達政宗により攻められ、城内に居た者は女・子ども、犬に至るまで容赦なく殺害された。その数八百名とも千名ともいわれる。織田信長の比叡山焼き討ちにも比肩するこの出来事は、「小手森城の撫で斬り」と呼ばれ、周囲の大名や民衆に衝撃を与えることになった――。

小浜城は、二本松市岩代支所の北方にそびえる山に本丸を構え、今に残る石垣が往時の姿を偲ばせる。1471年に大内晴継が築城した。同氏の前の居住地、若狭の国・小浜からその名が採られたという。伊達政宗は大内氏を攻め落としたあと、天下覇権を目指し会津若松攻めの本陣として、ここに一年間居城している。

政宗の居城した小浜城を「下館」と呼ぶ一方、2kmほど南にあり、小浜城と両翼で防衛体制を形成していた**宮森城**を「上館」と称し、父輝宗はここに居住した。この宮森城は戦国史上最も有名な拉致事件の舞台である。1585年(天正13年)10月、優勢な伊達・田村連合軍を前にした二本松城主畠山義継は、政宗に降伏を申し入れるが、厳しい講和条件を突きつけられる。輝宗の取り成

しにより和議の条件は緩和されることになったが、疑心暗鬼になっていた義継は、見送りに出た輝宗を拘束して根城である二本松城へと帰投することを試みるのである。

鷹狩りに興じていた政宗は、とって返して父を奪還しようとしたものの、いかんともしがたく、人質たる父もとも目がけて一斉射撃を行い、この一件で父輝宗は畠山義継とともに最期を遂げる。小規模な戦いで名将二人が果てた稀な戦いとなったこの場所は、「**栗ノ須古戦場**」(二本松市沖)として残され、毎年、事件が起こった10月8日に忌年祭が開かれている。

なお、畠山家の墓所は、本町の**称念寺**にあり、畠山家累代や「栗ノ須の戦い」で戦死した家臣23名が祀られている。



小手森城跡 小浜城跡 称念寺 畠山家墓所

二本松城跡(霞ヶ城)

二本松城は、阿武隈山系の裾野に位置する標高345mの白旗ヶ峰を中心として、三方が丘陵で囲まれた、馬蹄形城郭で、自然地形を巧みに活用した要塞堅固な名城であった。

15世紀中ごろ奥州探題・畠山氏の居城に始まり、一時伊達氏の支配ののち、会津領として蒲生・上杉・加藤氏らの城代時代が続いた。

寛永20年(1643年)、丹羽光重公が白河藩から二本松藩10万7000石の初代藩主として移封され、以後220有余年にわたり丹羽氏の居城となり、慶応4年の戊辰戦争を迎えることになる。

戊辰戦争では、旧幕府軍(東軍)の要衝として位置づけられ、隣藩会津への義に殉じて戦火に巻き込まれた。



①春：桜の箕輪門 ②夏：あじさいと天守台 ③秋：霞ヶ城全景(左上隅にあるのが天守台) ④冬：洗心亭



二本松城跡

日本百名城として多くの方が訪れる、梯郭式の平山城。現在は公園として整備され、園内には多くの見どころがある。特に天守台からの眺めは絶景。市内一円を見渡せる。平成19年国史跡指定



6《智恵子抄詩碑》 高村光太郎直筆『樹下の二人』『あどけない話』の一説を、伝説が残る大小一對の「牛石」に銅版ではめ込んでいる。周囲の円形野外地のイメージは、詩人の草野心平の発案。



5《傘松》 別名「八千代の松」とも言われるアカマツの巨木で、樹齢350年を越す。1本の幹から四方に枝を伸ばした独特の形状は見事。



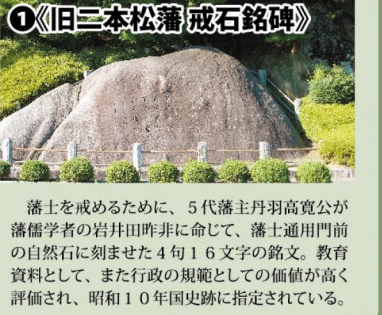
4《洗心亭》 城内に唯一残る江戸期の建造物で、木造茅葺き・寄棟平屋造りの茶亭。当時は『墨絵の御茶屋』といわれていた。一時阿武隈川河畔に移築し、藩主の釣り茶屋としていたものを、明治40年に再移築した際に、丹羽家16代当主が上方にある洗心堂に因み、『洗心亭』と名付けた。



3《箕輪門》 初代藩主丹羽光重公入部まもなく、城内整備のため御殿とともに最初に建造した櫓門。支柱材料の巨木は領内箕輪村山王寺の大神木を用いたことから、この名がある。



2《三本松少年隊群像》 戊辰戦争二本松最大の激戦地・大壇口における二本松少年隊の奮戦姿と、わが子の出陣服を仕立てる母の姿を、日本芸術院会員・名誉市民の彫刻家橋本聖太郎氏がブロンズ制作。平成8年建立。



1《旧三本松藩戒石銘碑》 藩士を戒めるために、5代藩主丹羽高寛公が藩儒学者の岩井田昨非に命じて、藩士通用門前の自然石に刻ませた4句16文字の銘文。教育資料として、また行政の規範としての価値が高く評価され、昭和10年国史跡に指定されている。